

札

幌には、大学の友人が帰省しており、しばらくやっかいになった。あとは、小樽からフェリーに乗れば帰ったも同然なので、すっかり気が緩んでしまった。たまたま同じ島根の友人もバイクで一人旅をしており、連絡など一切取っていなかったのにもかかわらず、札幌の友人宅で鉢合わせした。ケータイもSNSもないときのこと、偶然の妙味に二人で驚喜した。迎える友人宅は、負担が二倍になったのだが、そんなことに気を遣えるようになるのは、まだまだ先のことである。

高橋和巳の小説に、主人公の実家を友人二人が遠方から訪ねてくる場面がある。三人は、しばらく革命について討論をするのだが、その間主人公の母親は、学生たちを精一杯もてなそうとすぎ焼きの準備をする。話を終えた二人は、主人公に別れを告げて帰り支度を始める。察した母親はおろおろしながら、でも懸命に引き留める。だが、二人はさつきと帰っていくのである。極貧の暮らしの中ですぎ焼きの用意をすることが何を意味するのか、想像しようとしてもいない友人たちや彼らが抱く志に主人公は不信感を抱くのだった。

この印象的な場面を、思想は脇に置いて、ぼくは極めて道徳的に読んだ。母親が気の毒でならなかったのである。出されたものは食べ尽くさねばならないと反

射的に思ってしまうのは、何もこの小説を読んでからではないのだが、補強されたことは間違いない。

友人宅に逗留する間、彼の母親の心づくしを無駄にすることはなかったが、逆に底なし沼のような食欲を有する男たちに日々せっつかれ、どれほどくたびれたことか、思い出すと赤面を禁じ得ない。札幌と言えどビールだ、ジンギスカンだ、とすっかり出来上がって帰ることも一度ならず。かなり恥ずかしい。

フェリーの出航日が来、札幌を後にした。小樽から舞鶴まで二泊三日の船旅は、退屈との戦いだつた。ただ乗っていれば山陰まで運んでくれるのだからこれほど楽なことはないのだが、同時にこれほどつらいこともない。二等船室とデッキを幾度行き来しても見えるものは海と押し黙った人々の横になった姿のみだ。たまたま書店でこれまで買ったこともない文芸雑誌を求め、読むことにした。まったく興味湧かない小説もありはしたが、ひととき物語の世界に没入できた。その間だけは、退屈に苦しむことはなかったのである。外出する際には、常に一冊の本を持つのが習慣になったのもこのときからだ。

約一月の旅を終えて帰宅。母はぼくの姿を見て卒倒しそうになった。気の緩みから一週間以上も連絡を怠っていた。



専業ババ奮闘記 (その2) 72

木幡智恵美

義母の異変 (4)

毎年お盆前になると、義母は仏壇の周りの掃除をし、市にお供え物を買いに自転車を出かけていた。花の木はもとより、小さいスイカを供え、仏様に供えるお膳も自分で作っていた。家族の食事は基本私が作っていたが、その頃は一人で食べる昼ごはんは自分で用意していたし、たまに煮物を作ってくれていることもあった。

膝が動きにくくなり、習い事のフォークダンス、コーラス、生け花は、九十歳が近づく頃から一つずつ辞めていき、台所に立つこともほとんど無くなっていった。そうになると、お盆のお膳作りは私の仕事となる。これが結構面倒なのだ。小さなお膳の上には、ままごとで使うような漆塗りの器が五種類あり、ご飯、みそ汁、煮物、煮豆、酢の物を作って盛り付けねばならない。煮物は煮たカボチャやナスやニンジン、昆布や高野豆腐などを小さく切り、みそ汁に入れる豆腐や酢の物にするキュウリなどもミニサイズにしなければならなかった。しかも、それを十三日から三日間続けるのだ。仏壇に団子と共に乗せると、義母は箸を使って食べさせる真似をする。それが終わると、膳を下げに行った。

しかし、車椅子生活になってから、毎朝晩やっていた勤行も、していないのに、「もうしました」と言う日が出てきたかと思うと、そのうち部屋の椅子に座ったまま、「ここからでいいわ」と、仏壇の前まで行かず手を合わせるようになった。そこで、「お盆のお供えは、団子と盆菓子とスイカでいいですか」と聞いてみると、「それでたくさん」と言われる。仏壇には菓子と、畑でできた小ぶりのスイカを乗せ、団子だけは三日間供えることにした。

十三日は団子を供え、義母をデイスーパーに送ってから、松江の公園墓地、出雲は親戚の墓も含めて四箇所の墓参り。

翌十四日の午後、義姉と姪二人がやってきたので、眠っていた義母を起こす。二時間ほど皆と話しているうちに、義母はこくりこくり。三人が帰っても、椅子にもたれて眠っていた。夕食が終わると、「もう寝ます」と言われるので、「こんなに早く寝たら、夜中に目が覚めますよ」と言うが、すでに目を閉じているので、トイレに連れて行き、着替えさせてベッドに横になってもらう。それから二時間後、ドンドンドン。「眠れませぬ」。だから、言ったのに。

30代フリーター やあ、ジイさん。岸田文雄が市場原理に忠実な新自由主義を批判し、再分配を重視する「新しい資本主義」を掲げた。

年金生活者 資本主義を擬人化した言い方をすれば、資本主義自身が「もうグローバル化ではあまりもうかりそうにないから、政府に財布のひもを緩めさせてそのカネを搾り取るう」と考え始めたことが背景にある。

先進諸国を中心としたゼロ金利、マインナス金利の恒常化にみられるように利潤の大幅な縮小に直面している現在の資本主義は新たな利潤の源泉を求めており、その有力な候補が気候変動、パンデミック、格差の拡大といったもろもろの「危機」だ。それらに対処するために国家が再分配する富を利潤に変えようという魂胆が見える。

脱炭素に取り組む企業や、コロナ禍の中で雇用を維持する企業への政府の補助金はそのまま利潤に転化し得るし、格差の縮小をはかる社会保障政策の拡充は需要の喚起を通して利潤を生

つとして、イノベーションをしなくてももうかる構造ができてしまったことがあげられる。2%のインフレ目標を達成するために日銀が続けてきたゼロあるいはマインナス金利政策は円安を誘導し、自動車をはじめとしたグローバル企業にとって輸出がしやすくなった。それらの企業はイノベーションに手を抜いても利益をあげられるようになった。

つまりアベノミクスの3本の矢、すなわち大胆な金融政策、機動的な財政政策、民間投資を喚起する成長戦略のうち、3本目の成長戦略が的を射ることはなかった。的を射抜くようにするには企業のイノベーションを促すしかない。それには規制をゆるめ、競争を促す必要がある。それは岸田政権が決別を宣言した新自由主義的な政策であり、実行されることはないだろう。

30代 岸田政権は「経済安全保障」担当の国務大臣を新設し、当選3回の若手を起用した。衆院選の公約では「経済安全保障」の強化をはかる法整備を

む。岸田政権の経済政策はそれをあと押しする諸施策が並んでいる。

新自由主義は規制の緩和、撤廃を利潤の源泉とすることを目指した。その最大の具体化がモノ、カネ、ヒトの国境を越えた移動の自由化、すなわちグローバル化だった。その進展は、発展途上国の労働者の賃金を上げ、国際的な格差を縮小する一方で、先進諸国の労働者の賃金を下げ、国内での格差を広げた。それは資本主義にとってはモノが売れなくなる危機を意味した。転んでもただでは起きない資本主義はその危機を新たな利潤の源泉にしようと、他の危機も抱き合わせて国家に再分配機能を発揮させることをもくろみ始めたと考えることができ。

30代 朝日新聞の世論調査では、岸田内閣の支持率は45%で、発足時の菅内閣の65%を大幅に下回った。

年金 携帯電話の値下げや最低賃金の引き上げなど、国民生活に直結する具体策を打ち出した前政権に比べると、岸田政権の掲げる「新しい資本主義」

掲げている。

年金 かつて破壊と流血をともなう熱い戦争によって繰り広げられた資源や資本の争奪を、破壊も流血もともなわない「経済戦争」によって実行するためだ。

それは戦争の新たなカテゴリの誕生

や「成長と分配の好循環」は抽象的で、頼りなく映ったのではないか。国民は長期にわたる経済の停滞に倦み、それを打ち破る政策を望んでいたのに、期待外れと感じたに違いない。

長期停滞を端的に示しているのが物価の低迷だ。2年で達成すると日銀が宣言していた2%のインフレ目標は8年半たった今も達成の見通しが立っていない。

物価が上がらないのは需要が不足しているからだ。不足の要因のひとつは消費者の欲しいものが少ないことにある。高度経済成長を経たあとの現在の家計消費は必需的消費と選択的消費がほぼ半々になっている。欲しいものが少ないということは、選択的消費の対象になるものが少ないということだ。言い換えれば人びとを引きつける新しいモノやサービスが乏しいということでもある。

このことは企業が新しい商品を開発するためのイノベーションに熱心でないことを示している。その要因のひとつ

生を意味する。世界の戦争の本流は東西冷戦を境に熱い戦争、リアルな戦争から、抑止力を競う冷たい戦争、バーチャルな戦争に移った。「経済安全保障」と名づけられた新しい戦争はそのどちらにも属さない。あるいはどちらにも部分的に属している。破壊も流血もともなわないという意味では冷たい戦争だが、敵の経済力を略奪あるいは破壊する点ではリアルな戦争であり、「第3の戦争」と呼ぶこともできる。

産業のソフト化が進展した現在、資源も資本も目に見えないシステムを介してしか利用することができない。ハードな産業である製造業が経済を牽引していた第2次世界大戦の時代は、ソフト化はそこまで進んでいなかった。だから、破壊と流血という目に見える方法でそれらを奪い取ったり、破壊したりすることが大量にできた。現在はそれをするに利益よりも損失が上回る。そのため「経済安全保障」という名の戦争が世界の戦争のトレンドのひとつとなりつつある。

ニュース日記 804
中村 礼治

岸田新政権